様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２６７９

研究課題名（和文）中国甘粛・青海省におけるモンゴル系の危機言語、河湟語の調査研究

研究課題名（英文）A Study on the Sirongol Languages, Mongolic Endangered Languages of the Qinghai-Gansu Area in China

研究代表者
佐藤　暢治（SATO, NOBUHARU）

広島大学・国際協力研究科・教授

研究者番号：９０２６３６５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：中国甘粛・青海省で話されているモンゴル系の危機言語、河湟語の中でも特に保安語と土族語に焦点をあて、東郷語、康家語、東部裕固語にも言及しつつ研究をおこなった。
保安語については、現地調査にもとづく資料収集とその分析、「保安語民話集」の作成(保安語と漢語二言語対照版）、そして既存資料に基づく「保安語積石山方言語彙集」の作成をおこなった。土族語については、土族語の言語特徴をモンゴル系諸言語全体のなかでどのように位置づけるのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
河湟語は危機言語であると同時に、モンゴル系諸言語のより古風な言語特徴と改新的な言語特徴を持つ言語である。
そのため、本研究で得られた成果はモンゴル系諸言語の歴史研究に新たな光を注ぎ、モンゴル言語学の発展に大きな貢献をしうる点を学術的意義として指摘することができる。そして、保安語の研究成果、特に保安語と漢語二言語からなる「保安語民話集」は保安語の継承という点から現地社会へ貢献しうる点で、社会的に大きな意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this study we focused on Shirongol languages - mainly, Bonan language and Tuzu(Mongghul/Manghuer) language -, Mongolic Endangered Languages of the Qinghai-Gansu Area in China.
As for Bonan language, we collected the words and grammars at fieldwork and analyzed them. Moreover we created "Bonan Folklore" and "Jishishan Bonan Vocabulary". As for Tuzu language, we characterized its linguitic features in Mongolic languages.

研究分野：言語学

キーワード：危機言語　モンゴル系言語　河湟語　保安語　土族語

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究課題は、科学研究費補助金（「モンゴル系の危機言語、保安語積石山方言にかんする調査研究」（基盤研究（C）一般、平成 24～26 年度）、「消滅の危機に瀕した中国甘粛省、青海省のモンゴル系孤立諸言語にかんする調査研究」（基盤研究（C）一般、平成 21～23 年度）等の研究を継承発展させたものである。

本研究で取り上げた中国の甘粛省、青海省で話されているモンゴル系の言語、保安語積石山方言や土族語等は総括して河湟語と呼ばれ、モンゴル系諸言語において次のような位置づけにある。

（１）モンゴル系諸言語において孤立的な位置に立ち、モンゴル系諸言語の歴史研究に重要な貢献をする可能性がある。それは、狭義の（ハルハ）モンゴル語、ブリヤート語などとは異なり、河湟語がモンゴル系言語のより古風な特徴を保存継承しつつも、同時に異言語との接触による特異な言語変化を蒙ったからにほかならない。

（２）消滅の危機に瀕した言語であり、このままでは十分な言語記述もされないまま数世代後には消滅する可能性がある。

保安語積石山方言については、研究代表者である佐藤が、2000 年以降これまでに十数度にわたり現地調査をおこない、社会的・文化的背景とともに老年層から語彙、例文、民話などを収集してきた。それ以前は、1950 年代後半と 1980 年代に調査をおこなった Todaeva,B.X.(1964)《Baoanskij jazik》Moskva、布和　劉照雄(1982)『保安語簡志』民族出版社、Li,C.N.(1983)"Language in Contact in Western China", *Papers East Asian Languages* 1, 31-51、陳乃雄(1989)「保安語的語音和詞彙」『西北民族研究』2, 16-40、陳乃雄(1990)「保安語的語音和詞彙」『西北民族研究』1, 32-48 があるだけであった。佐藤の一連の研究により保安語積石山方言の研究は飛躍的に発展し、一連の研究は中国でも高い評価を受けている。研究内容とその評価は、鍾進文(2007)『甘青地区特有民族語言文化的区域特征』中央民族出版社などで詳細に述べられている。

土族語についても、研究分担者である角道がこの十数年にわたり精力的に研究を推進している。特に角道(2012)『土族語語彙集』と角道(2008)『土族語互助方言の研究』は現在の土族語研究の頂点をなすものである。こうした角道が行った一連の研究も、中国では高い評価を受けており、その評価も鍾進文(2007)『甘青地区特有民族語言文化的区域特征』中央民族出版社で詳細に述べられている。

しかし、保安語積石山方言にせよ土族語にせよ、まだ未解明な問題は多く、消滅の危機に瀕した言語であることからも、緊急の調査研究が望まれている。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の三点を明らかにすることにある。

（１）モンゴル系言語のなかで調査研究が遅れている保安語と土族語の全体像をすこしでも明らかにすることである。

（２）得られた研究成果を現地社会へ還元し、当該話者の人々との連携のもと、当該言語における次世代への継承に協力することである。

（３）モンゴル系諸言語の歴史研究、言語接触研究に貢献することである。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するため、研究期間は 2016 年度から 2018 年度までの 3 年間とした。変動が激しい中国社会の状況を考えると、研究に一区切りをつけることができる 3 年という時間が適切である。

本研究では、主として、研究代表者の佐藤が保安語積石山方言の研究を担当し、研究分担者である角道が土族語の研究を担当した。

佐藤が担当した保安語積石山方言の研究については、2016 年度と 2018 年度の二回、約 1 週間、甘粛省臨夏回族自治州積石山保安族東郷族撒拉族自治県大河家鎮において現地調査をおこなった。調査は、保安族の若手研究者、馬沛霆をはじめとする保安族の人々と連携する形でおこなわれた。

具体的な研究方法は，次のとおりである。

（１）保安語積石山方言における全体像の調査

①調査項目の整理と準備

②現地調査

③収集資料の整理と分析

（２）現地社会への還元

①『保安語民話集』の作成

角道が担当した土族語の研究については、これまでに活用できる資料をもとに、土族語の言語特徴を河湟語の中で、あるいはモンゴル系諸言語全体の中でどのように位置づけることができるのかという視点で研究が進められた。

４．研究成果

研究成果について、主な研究成果、研究成果における国内外の位置づけとインパクト、今後の展望の順に記す。

（１）主な研究成果

①保安語積石山方言の研究成果

図書を三冊公刊した。

一冊目は、保安族の若手研究者である馬沛霆との共編で中国の民族出版社から公刊した『保安語漢語詞典』である。この辞典は、保安語積石山方言を記録した世界初の本格的な辞典である。表記は中国式のローマ字であるピイインに準拠しており、約 2100 語を収めている。保安族の家庭、学校に配布されている。

二冊目は、これまでに公刊されている保安語積石山方言の全資料から全語彙を抽出し作成した『保安語積石山方言語彙集』である。ここには 1950 年代の調査による語彙資料である Todaeva,B.X.(1964)《Baoanskij jazik》、清格尔泰 陈乃雄（1979）『我国蒙古語族諸語言対照六百基本詞滙合編』内蒙古大学蒙語研究室をはじめとして、孫竹主編（1990）『蒙古語族語言詞典』青海人民出版社、布和 劉照雄編（1982）『保安語簡志』民族出版社、陳乃雄（1989, 1990）「保安語的語音和詞滙」『西北民族研究』などに記載されている保安語積石山方言の語彙が収められている。

三冊目は、『保安語民話資料 保安族民間故事 1』である。ここには、『保安語漢語詞典』で用いたピンイン式ローマ字による保安語と漢語の二言語で併記された保安族の民話 3 編が収められている。

『保安語積石山方言語彙集』は今後の保安語の歴史比較研究において、そして『保安語漢語詞典』と『保安語民話資料 保安族民間故事 1』は文字表記された保安語の普及に貢献できるものとして重要な意義も持つ。

論文と口頭発表については、保安語積石山方言の人称代名詞を論じたものと Egophoricity について論じたものを特に取り上げておく。

人称代名詞を論じたものとしては、「保安語積石山方言における一人称複数代名詞の包括形と除外形」と「保安語積石山方言の三人称代名詞」がある。「保安語積石山方言における一人称複数代名詞の包括形と除外形」では、その用法と歴史的変化を明らかにした。保安語積石山方言における包括形と除外形は包括形と除外形の典型的な区別に加え、「われわれ意識」を持つ恒常的な集団を表す場合、公的な集団であればあるほど包括形が聞き手を含むことなく使われる傾向にあることを明らかにした。そしてさらに、包括形と除外形の形式がモンゴル祖語のそれらと逆転するに至った通時的変化として、一度包括形と除外形の区別が無くなったが、その後再度包括形と除外形の区別を持つことになった史的過程を明らかにした。

「保安語積石山方言の三人称代名詞」においては、保安語積石山方言の二つの三人称代名詞 ʤaŋ と gaŋ（モンゴル文語の ejen「主」と irgen「民」に対応）の用法、史的発展を明らかにした。ʤaŋ は保安語の前段階で「主」から「三人称」への意味変化が起き、三人称代名詞として使われるようになった。一方、gaŋ は「民」から「他の人」へと変化し、さらに三人称代名詞しても使われるようになった。その結果として、ʤaŋ は gaŋ とは異なり、「他の人ではなく彼」という排他的な意味合いを伴う三人称代名詞へと姿を変えた。

Egophoricity については、「保安語積石山方言の話し手は文が表す事態をどのように捉えているのか」において、保安語積石山方言が文末の動詞あるいは助動詞を用い、文が表す事態を話し手の個人的な体験の関与を軸に、自己中心（「I 形式」）か、それとも非自己・他者中心（「0 形式」）に捉えていることを明らかにした。話し手に関わる事態であっても、話し手にとって非制御、非意図、予 想外、仮定のこと、また話し手から聞き手に配慮が働く場合には「0 形式」が使われる。一方、聞き手と第三者に関わる事態には通常「0 形式」が使われるが、話し手の個人的な体験が関わる実現過程の把握、熟知、推測、また聞き手への反論には「I 形式」が使われる。

②土族語の研究成果

土族語の言語特徴が河湟語あるいは他のモンゴル系諸言語との関係において、どのように位置づけできるかを明らかにしている。

「モンゴル諸語における語幹末の n」では、モンゴル系諸言語には隠れた n が存在する言語と隠れた n が存在しない言語が存在し、土族語は前者、土族語を除く河湟語は後者に属することを明らかにした。

「河湟語及び達斡尓語の従属節主語表示」では、モンゴル語と違って河湟語では従属節の主語が属格や対格で表示されることが非常に少ないことを明らかにした。

「モンゴル諸語の「生まれる」を表す表現」では、土族語互助方言、民和方言、そして東部裕固語と保安語は自動詞「生まれる」（主語（格）＋自動詞）と他動詞「産む」（主語（格）＋目的語＋他動詞）の対立があるモンゴル語ハルハ方言とは異なり、自動詞「生まれる」と他動詞「産む」が同じ形式で表され、自動詞「生まれる」はその主語が表す格から他動詞として機能していることを明らかにした。

そのほかにも、土族語の egophoricity について、「土族語の Conjunct/Disjunct について」で論じ、土族語互助方言及び民和方言の無標の形式では一人称平叙文及び二人称疑問文の述語に主観範疇、それ以外で客観範疇の接辞が要求されること、そして有標の場合（一人称主語が出来事をコントロールできない場合）は客観範疇の接辞が用いられ、話者が出来事に関与している場合は三人称主語の述語には主観範疇の接辞が用いられること、しかしこの傾向は方言的差異及びジャンルによっては必ずしも遵守されないことを明らかにした。

（２）研究成果における国内外の位置づけとインパクト

鍾進文（2007)『甘青地区特有民族語言文化的区域特征』中央民族出版社のなかで詳細に述べられているように、佐藤がこれまでにおこなってきた保安語積石山方言に関する研究と、角道がこれまでにおこなってきた土族語に関する研究は中国でも高い評価を受けている。本研究成果も、保安語積石山方言と土族語の研究をさらに発展させたと言って良い。

（３）今後の展望

これまでの研究により多くの成果が得られている。しかし、わからないことはまだ多い。消滅の危機に瀕した言語である保安語と土族語の資料を可能な限り、いまのうちに収集し整理し、わからないことは確認していく必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

１．角道正佳（印刷中）「土族語の「どこ」を表す表現」『日本モンゴル学会紀要』49、査読有
２．角道正佳（2018）「土族語の Conjunct/Disjunct について」『ユーラシア諸言語の多様性と動態－20 号記念号－』20、161-177、査読有
３．角道正佳（2018）「モンゴル諸語の数量詞句」言語の類型的特徴対照研究会（編）『言語の類型的特徴対照研究会論集』53-95、査読無
４．佐藤暢治（2016）「保安語積石山方言における一人称複数代名詞の包括形と除外形」『広島大学中国学プロジェクト研究センター紀要』創刊号、9-27、査読有

〔学会発表〕（計９件）

１．角道正佳（2018）「モンゴル諸語の「生まれる」を表す表現」日本モンゴル学会 2018 年度秋季大会
２．角道正佳（2018）「Preaspiration　－特に保安語同仁方言について－」近畿言語音声研究会
３．角道正佳（2018）「保安語同仁方言の阻害音 －Fried (2010)の四項対立について－」2017 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会
４．角道正佳（2017）「土族語及びモンゴル語派言語の数量句」言語の類型的特徴をとらえる対照研究会第 4 回公開発表会
５．佐藤暢治（2017）「保安語積石山方言の三人称代名詞」日本言語学会第 155 回大会
６．角道正佳（2016）「モンゴル諸語における語幹末の n」日本モンゴル学会 2016 年秋季大会
７．角道正佳（2017）「河湟語及び達斡尓語の従属節主語表示」2016 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会
８．佐藤暢治（2016）「保安語積石山方言の話し手は文が表す事態をどのように捉えているのか」日本言語学会第 153 回大会
９．佐藤暢治（2016）「保安語の記述をめぐる諸問題―積石山方言を中心に」「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」2016 年度第 1 回研究会

〔図書〕（計３件）

１．佐藤暢治（2019）『保安語積石山方言語彙集』広島大学、180 頁
２．佐藤暢治（2019）『保安語民話資料　保安族民間故事１』広島大学、13 頁
３．馬沛霆　佐藤暢治（2016）『保安語漢語詞典』民族出版社、198 頁

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：角道　正佳
ローマ字氏名：KAKUDO MASAYOSHI
所属研究機関名：大阪大学
部局名：日本語日本文化教育センター
職名：名誉教授
研究者番号（8 桁）：３０１４４５３８

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。